

日本漢詩における対句の形

——平安前期の日本漢詩における隔句対の運用をめぐる——

コ
顧
サンサン
姍姍

一、漢詩における隔句対について

副題にあるように、本発表は、隔句対の運用という視点から、平安前期の日本漢詩の対句の形を考察するものである。対句表現については、既に数多くの先学に指摘されているように、中国詩学において最も顕著な修辭的特徴であり、漢詩文学の展開につれて、初唐に至り、様々なバリエーションが生まれてきたのである。本発表で考察する隔句対は、漢詩の対句表現の一つとして、『筆札華梁』（上官儀（約六〇七一六六四年））、『文筆式』（作者不詳。盛唐以前）、『詩格』（旧題魏文帝。初唐）、『詩議』（皎然（七二〇—七九八年））等に説かれており、中国唐代の詩学理論において既に定着したものである^①。

通常の対句は、連続する二つの詩句を対にしており、句を対の単位にしている。これに対して、隔句対は

昨夜越溪難 含悲赴上蘭

今朝踰嶺易 抱笑入長安

昨夜 溪を越ゆること難し、悲しみを含んで上蘭に赴く。

今朝 嶺を踰ゆること易し、笑ひを抱きて長安に入る。

（『文鏡秘府論』東卷^②）

のように、句を隔てて、第一句と第三句、第二句と第四句を対照させており、聯（二句）を対の単位にしているのである。つまり、隔句対は、通常の対句に

見られる対比・対照の性格をもちながらも、その具体的な形においては、通常の対句と異なり、独特の形式を有している。こういう独自の形を持つ対句を考察の手掛かりにすることは、日本漢詩の対句の特質を明らかにするために、一つの有効な考察方法ではないかと考える。

二. 平安前期の日本の文学理論書における隔句対

平安前期の日本詩人が漢詩を創作する際に、中国や朝鮮などの国から渡来された漢籍の書物が不可欠な糧であったことを考えると、日本漢詩人の隔句対に対する認識は、漢籍に載るその情報と密接なかかわりをもっていると思われる。

前述した隔句対を説いた唐代の詩話は、大同元（八〇六）年に、留学僧の空海により日本に将来されたのである。それは、最初の勅撰漢詩集『凌雲集』の成立より十年ぐらい早い時の事である。また弘仁年間、彼は網羅した詩話を整理編集し、文学理論書の『文鏡秘府論』を完成させ、また本書の要所を抜粋し、『文筆眼心抄』を著した。『文筆眼心抄』の成立時期は、弘仁十一年（八二〇）年であるため、隔句対の日本における理論としての確立は、遅くとも弘仁十一年以前であり、つまり勅撰三集の最後を飾った『経国集』結集以前であることがわかる。

『文鏡秘府論』の東巻は、対句の二十九種類の第二種類目において、隔句対の用例と用法を詳細に記している。前に引いた一例を始めとして以下の四例の実例が示されている。

相思復相憶 夜夜泪沾衣

空悲亦空嘆 朝朝君未帰

相ひ思ひて復た相ひ憶ひ、夜夜 泪 衣を沾す。

空しく悲しみて亦た空しく嘆き、朝朝 君未だ帰らず。

月映茱萸錦 艶起桃花頬

風発蒲桃綉 香生云母帖

月は茱萸の錦に映え、艶は桃花の頬に起る。

風は蒲桃の綉を発き、香は雲母の帖に生ず。

翠苑翠叢外 単蜂拾蕊帰

芳園芳樹裏 雙燕歷花飛

翠苑翠叢の外、単蜂 蕊を拾ひて帰り。

芳園芳樹の裏、雙燕 花を歴て飛ぶ。

始見西南楼 纖纖如玉鉤

末映東北墀 娟娟似蛾眉

始めて西南の楼に見るに、纖纖として玉鉤の如し。

末に東北の墀に映じ、娟娟として蛾眉に似たり。

これらは、『文筆眼心抄』にも記載されている。またうち四つの隔句対の用例の後に、「釈に曰く…」というよう様式がとられ、その構成については詳細に解釈している。例えば、前に引用した用例については、「釈に曰く、第一句の昨夜と第三句の今朝と對し、越溪と逾嶺と是れ對し、第二句の含悲と第四句の抱笑と是れ對し、上蘭と長安と對す」とある。

つまり、九世紀前半の知識人たちは、これらの用例と解釈を通じて、隔句対を理解しうる可能性が高いと考えられる。

三. 大学寮の教科書である『詩経』・『文選』における隔句対

前述した隔句対の定義を基準にして、本発表では、まず中国最古の詩集である『詩経』、また漢魏六朝の文華を収録した『文選』の詩作を考察の対象にし、両集における隔句対を調べてみた。本発表の調査結果により、『詩経』には九十六例、『文選』の「詩篇」の部門には、八例見つかった。まず『詩経』にある隔句対を見てみる。

参差荇菜 左右流之

窈窕淑女 寤寐求之

(『詩經』周南・閟雎^③)

参差たる苕菜は、左右に流む。

窈窕たる淑女は、寤寐に求む。

参差苕菜 左右采之

窈窕淑女 琴瑟友之 (同上)

参差たる苕菜は、左右に采る。

窈窕たる淑女は、琴瑟もて友す。

参差苕菜 左右芼之

窈窕淑女 鍾鼓樂之 (同上)

参差たる苕菜は、左右に芼る。

窈窕たる淑女は、鍾鼓もて楽む。

この三つの用例は、『詩經』の冒頭における一首の詩作に用いられているものであり、二十句の原詩のうち、半分以上の十二句が隔句対の形を取っていることがわかる。

また、『文選』からの用例を見てみる^④。

吾希段干木 偃息藩魏君

吾慕魯仲連 談笑却秦軍 (卷二十一「詠史八首」三 左太冲)

吾は ^{こひねが}希ふ ^{だんかんぼく}段干木の、偃息して魏君に藩たりしを。

吾は慕ふ ^{しりぞ}魯仲連の、談笑して秦軍を却けしを。

貴者雖自貴 視之若埃塵

貧者雖自賤 重之若千鈞 (同上「詠史八首」六)

貴者は自ら貴ぶと雖も、之を視ること埃塵^{あいちん}の若し。

貧者は自ら賤しむと雖も、之を重んずること千鈞^{せんきん}の若し。

習習籠中鳥 拳翮触四隅

落落窮巷士 抱影守空虛 (同上「詠史八首」8)

習習たり籠中の鳥、翮を挙げ四隅に触る。

落落たり窮巷の士、影を抱きて空廬を守る。

この三つの用例は、左太沖の手によって「詠史八首」の三首において使われているものである。同じ作品群にあるため、比較的に読み取りやすい対句の表現法ではないかと考えられる。

なお、以下の日本の『養老律令』の学令と考課令からもわかるように、『詩経』と『文選』が奈良時代から国家最高教育機関である大学寮において用いられる教科書であったことは周知の通りである。

凡そ経は、周易・尚書・周礼・儀礼・礼記・毛詩・春秋佐氏伝は各一経となす。(学令^⑤)

凡そ明経は、試みむこと周禮・左傳・禮記・毛詩各四条。(考課令)

凡そ進士は、試みむこと時務策二条。帖じて読まむ所。文選の上帙に七帖。(考課令)

つまり、『詩経』や、『文選』の詩篇を通して、平安前期の知識人たちが隔句対を読み取った可能性がかなり高いと言える。殊に、勅撰漢詩集における駢儷文などをみると、実際に隔句対の文章がすでに用いられており、熟練した文学表現法であることがわかる。

こうした文学素養を有する人たちは、その漢詩の創作において隔句対を用いていたかどうか、たまたもし用いたならば、如何に運用していたのか、とても興味深い問題となる。

四. 平安前期の日本漢詩における隔句対

本発表では、平安前期の漢詩文学を代表とする勅撰漢詩集と『田氏家集』、『菅家文草・後集』における隔句対を考察の対象にした。調査結果によれば、

九世紀前半を代表する勅撰三集『凌雲集』（八一四年）、『文華秀麗集』（八一八年）、『経国集』（八二七年）の詩作において隔句対の運用が一例もなかったのに対し、九世紀後半の詩人、島田忠臣の『田氏家集』（八九一年）と菅原道真の『菅家文草・後集』（九〇〇・九〇三年）には、それぞれ二例、十一例あった。つまり、現存作品に限るとはいえ、勅撰三集時代には隔句対はまったく用いられず、島田忠臣、菅原道真の時代になり、はじめて運用されるようになったことがわかる。まず、島田忠臣の詩作における隔句対を見てみよう。^⑥

李老擁龍姿 聊興世間塵

孔子懷鳳德 曾言我道窮（『田氏家集』211「歎李孔」）

李老は龍姿を擁す。聊か世と間塵を同じくす。

孔子は鳳徳を懷く。曾て言ふ 我が道窮すと。

大周非無人 眞人謝匪躬

小魯尚有君 將聖不登庸（同上）

大周 人無きに非らず。眞人 匪躬を謝す。

小魯 尚し君有り。將聖 登庸せられず。

この二つの用例は、古体詩の様式である原詩においては連続的に使われており、島田忠臣が隔句対を古体詩の対句表現として認識していたと考えられる。

また、菅原道真の詩作における隔句対を見てみよう。^⑦

1. 我挙秀才日 箕裘欲勤成

我為博士歳 堂構幸経営（卷二 87「博士難。」）

我秀才に挙げられし日、箕裘 勤めて成さんと欲せり。

我博士と為りし歳、堂構 経営を幸ひにせり。

2. 明神若不愆玄鑑 無事何久被虚詞

靈祇若不失陰罰 有罪自然為禍基（卷二 98「有所思。」）

明神若し玄鑑^{あやま}を愆たずは、事無きに何ぞ久しく虚詞^{かかふ}を被りてあらむ。
靈祇若し陰罰を失はずは、罪有るは自然に禍の基とならむ。

3. 十里百里又千里 駟馬如龍不及舌

六年七年若八年 一生如水不須決

(卷二 118「詩情怨。古調十韻。呈菅著作、兼視紀秀才。」)

十里百里また千里、駟馬は龍の如くなれども舌に及ばず。

六年七年若しくは八年、一生は水の如くなれども決るべからず。

4. 悪我偏謂之儒翰 去歳世驚自然絶

呵我終為実落書 今年人謗非真説 (同上)

我を悪むに偏に儒翰なりと謂ふ、去歳 世の驚くこと自然に絶ゆ。

我を呵して終に実の落書となす、今年 人の謗ること真説ならず。

5. 雖遇陽侯怒 基堅不近攻

雖遭班爾匠 材陋不為容 (卷三 236「舟行五事」一)

陽侯の怒りに遇うと雖も、基堅くして攻むるに近からず。

班爾の匠に遇うと雖も、材陋なくして容を為さず。

6. 若有僧為俗 寺中惡不通

仮令儒作吏 天下笑雷同 (卷三 236「舟行五事」二)

若し 僧の俗と為ること有らば、寺中惡みて通さざらむ。

仮令 儒の吏と作らば、天下雷同を笑ひなむ。

7. 茫茫不測水 豈是毛群栖

淼淼無涯浪 未曾野獸蹊 (卷三 236「舟行五事」三)

茫々たり測らざる水、豈これ毛群のすみならむや。

淼淼^{はて}たり涯し無き浪、未だかつて野獸の蹊ならず。

8. 早起呼童子 扶持殘菊花

日高催老僕 掃除庭上沙 (卷五 360「假中書懷詩。」)

早く起きて童子を呼ぶ、扶持す 殘菊の花。

日は高くして老僕^{もよお}を催し、掃除す 庭上の沙。

9. 裸身博奕者 道路呼南助

徒跣弾琴者 閭巷称弁御

(後集 483「慰少男女。」)

裸身にして博^{ばく}奕^{えき}する者、道路にて南助と呼べり。

徒跣にして弾琴する者、閭^り巷^ょにて弁の御と称^{とな}へり。

10. 君瞰我凶慝 擊我如神鬼

君察我無辜 爲我請冥理

(後集 486「哭奥州藤使君。」)

君 我が凶^{きょう}慝^{とく}を瞰^みれば、我を撃^うつこと神鬼の如し。

君 我が無辜^みを察^みれば、我がために冥理を請はむ。

11. 長者好漁竿 悔不早裁截

短者宜書簡 妒不先編列

(後集 490「雪夜思家竹。」)

長き者は漁竿に好^よかりしに、悔^くゆらくは早^たく裁^きち截^きらざりしことを。

短き者は書簡に宜^{ねた}かりしに、妒^{ねた}ま^つくは先^つづ編^つみ列^つねざりしことを。

創作時期から見れば、用例 1 は、道真が三十八歳時の「博士難」、用例 3・4 は、三十九歳時の「詩情怨」、用例 5 から 7 までは四十三歳時の「舟行五事」、用例 9 は五十七歳時の「少き男女を慰める」、用例 11 は五十八歳時の「雪の夜に家なる竹を思ふ」から引いたものである^⑧。つまり、彼は中年時代から老年時代にかけての長い期間に渡り隔句対を運用していたのである。

また、詩体からすれば、隔句対が運用された詩作は、皆古体詩である。道真の詩集における古体詩は、わずか十八首に過ぎず、そのうちの十首に隔句対が用いられていることがわかる。全古詩の半数を超えており、菅原道真は、隔句対を古体詩の対句の表現法として多く用いたことが明らかである。

ここで、島田忠臣と菅原道真との関係をあわせて考えると、師父と弟子とが漢詩句法の運用に対し同じ見方を持っているのは不自然ではない。ただ、隔句対の使用頻度を考えると、道真の詩集においては、隔句対が古体詩の表現法と

して定着していたが、忠臣の詩集においては、この表現法が一首のみにしか現れておらず、試みとしての運用であると見なして良からう。

ここまで述べたことから、空海の『文鏡秘府論』・『文筆眼心抄』、大学寮の教科書であった『詩経』・『文選』などにより、隔句対がすでに日本に持ち込まれていたにもかかわらず、漢詩においての実際の運用は、島田忠臣、菅原道真の時代になって初めて見られたことがわかる。この原因としては、承和以降に日本で流行している白居易の詩集が、九世紀後半の詩人に齎した刺激が大きかったことが挙げられよう。

五. 承和以降に流行した白居易の詩集における隔句対

白居易の詩集が日本に伝来した経緯、及び承和以降の日本詩壇におけるその流行については、数多くの先学により論じられている。本発表では、それらの論考を踏まえ、前述した九世紀前半と後半における隔句対の運用の差の問題を念頭に置きながら、白居易が詩作において如何に隔句対を運用していたのかという問題に絞り、考察を加えていきたい。

中国の漢詩詩学の権威である王力氏が、古体詩の対句を論ずる際に、白居易が隔句対を愛用する詩人であることに言及し、用例として『白氏文集』の巻三、巻四に収録された「諷諭三・新樂府」・「諷諭四・新樂府」から隔句対を十箇所挙げた^⑨。王力氏の見解をふまえ、あらためて『白氏文集』の巻一から巻四までの詩作における隔句対を調査してみた。調査結果は、以下に掲載している表の通りである。

表 1

『白氏文集』	作品数	隔句対
諷諭一・古調詩五言（巻一）	64 首	20 箇所
諷諭二・古調詩五言（巻二）	58 首	20 箇所
諷諭三・新樂府（巻三）	20 首	6 箇所
諷諭四・新樂府（巻四）	30 首	10 箇所

この表から白居易が隔句対をよく用いたことが一目瞭然である。

さらに、『白氏文集』巻一の冒頭に置かれた「賀雨」、「読張籍古楽府」、「哭孔戡」の三首に隔句対の形が七箇所現れていることから、それが読み取れる。殊に、第二首の「読張籍古楽府」には隔句対が四箇所も用いられている。以下の通りである。¹⁰⁾

読君学仙詩 可諷放佚君

読君董公詩 可誨貪暴臣 (『白氏文集』巻一「読張籍古楽府」)

君が学仙の詩を読めば、放佚の君を諷す可し。

君が董公の詩を読めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

読君商女詩 可感悍婦仁

読君勤斎詩 可勸薄夫敦 (同上)

君が商女の詩を読めば、悍婦の仁なるを感ず可し。

君が勤斎の詩を読めば、薄夫に敦を勧む可し。

上可裨教化 舒之濟万民

下可理情性 卷之善一身 (同上)

上は教化を^{おぎな}裨ふ可し、之を舒ぶれば万民を済ふ。

下は情性を^{おさ}理む可し、之を卷けば一身を善くす。

願藏中秘書 百代不湮渝

願播内楽府 時得聞至尊 (同上)

願はくは中に秘書として中に蔵め、百代湮渝せざるを。

願はくは内に楽府として播き、時に至尊の聞きを得るを。

ここで、白居易の詩作においての隔句対の多用、及び白居易の詩作が承和以降の日本詩人に大きな影響を齎したという共通の認識を合わせて考慮すれば、島田忠臣、菅原道真は、白居易の詩から影響を受け、古体詩に隔句対を用いたという可能性がかなり高いと言えよう。

ただし、島田忠臣・菅原道真と、白居易との隔句対に対する運用の方法においては、異なる点も存在している。以下の三点が挙げられる。

第一に、詩語からみれば、白詩の隔句対が同じ対語を使う場合があるのに対し、島田忠臣の隔句対はそれを完全に避け、道真詩の隔句対は、ある程度それを避けようとしていること。

第二に、詩句からみれば、白詩の隔句対が樂府詩に用いられているので、五文字と七文字等の長短句の組み合わせがあるのに対して、島田忠臣、道真詩の隔句対は、それがないこと。

第三に、詩体からみれば、白居易は、古体詩に留まらず近体詩にも隔句対を用いるのに対し、島田忠臣と菅原道真は、古体詩にしか使わないこと。

一点目について、白詩の場合は、相対している詩句には、同じ対語が用いられる場合がある。例えば、

読君学仙詩 可諷放佚君

読君董公詩 可誨貪暴臣 (『白氏文集』卷一「読張籍古樂府」)

君が学仙の詩を読めば、放佚の君を諷す可し。

君が董公の詩を読めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

のように、対を成している詩句には、それぞれ「読」、「君」、「詩」、「可」という同じ対語を用いている。さらに、極端な例を挙げると

太行之路能摧車 若比人心是坦途

巫峡之水能覆舟 若比人心是安流 (『白氏文集』卷三「太行路」)

太行之路能く車を摧くも、若し人の心に比すれば是れ坦途なり。

巫峡之水能く舟を覆すも、若し人の心に比すれば是れ安流なり。

では、同じ対語が七文字あり、対句の半分を占めている。

一方、島田忠臣の隔句対には、同じ対語が無く、道真の隔句対には、同じ対語が比較的少なくなっている。一聯の中では、同じ対語は一文字、二文字ぐらいの範囲に限られ、同じ対語が三文字に達する例は一つしかない。さらに、前述した道真の隔句対の用例 6、7、8 には、同じ対語が一箇所もない。

このことと『文鏡秘府論』、『文選』にある六朝時代の詩作の隔句対には同じ対語が極めて少ないことと何らかの関連があるのかもしれない。前述した『文鏡秘府論』に見られる五つの隔句対には、同じ対語が一箇所もない。また、『文選』に見られる八つの隔句対には、同じ対語を使っている用例が二例しかない。その二例は、前述した左太沖の「詠史八首」三と「詠史八首」六に見られる隔句対である。

二点目については、楽府詩の格式作法に原因があると考ええる。楽府詩は、もとは楽曲にあわせて歌われた歌詞で、楽曲により多様な形式があり、一句の字数が定まらない。唐代に入ると、それまでの伝統的な音楽が失われたが、そのスタイルは模倣されたので、詩句の字数にはやはり定めがない。白居易も卷三「新楽府」の序において「篇に定句無く、句に定字無し」と述べている。一例を見てみよう。

為君薰衣裳 君聞蘭麝不馨香

為君盛容飾 君看金翠無顔色

(『白氏文集』卷三「太行路」)

君が為に衣裳を薰ずれば、君蘭麝を聞きて馨香とせず。

君が為に容飾を盛にすれば、君金翠を看て顔色無しとす。

しかし、島田忠臣と菅原道真は楽府詩の創作をしていなかったため、字数の異なる隔句対もないわけである。このことは、『文鏡秘府論』、『文選』の詩作における隔句対についても同じことが言える。

三点目については、隔句対を近体詩に用いることがむしろ白居易の詩作の特徴であると考ええる。このことについて、王力氏も以下のように指摘している。

兩聯を相對させる對句の形は白居易が最も喜んで用いていた。(略) 律詩までに用いることもある。しかし、この種の對句はやはり古風の表現法であると見なすべきである^⑪。(『漢語詩律学』「第三十三節、古体詩對仗」、筆者記)

また、錢鍾書氏が『談芸錄』において白居易の句法を言及した際に、「白香山の律詩の句法には革新的なものが多い。その「主簿に酬ゆ」等の詩には、七言律詩に隔句(扇面)對をはじめて用いた(筆者記)^⑫」と述べている。筆者の調べたところによれば、錢氏が言った「主簿に酬ふ」は「醉後筆を走らせ劉五主簿長句之贈に酬い、兼ねて張大・賈二十四、二先輩昆季に簡ず」(『白氏文集』卷十二)の略称ではないかと考えられる。この詩の第四十聯と第四十一聯に、

我随鵷鷺入煙雲 謬上丹墀為近臣

君同鵷鳳栖荊棘 猶著青袍作選人 (『白氏文集』卷十二「醉後走筆酬劉五

主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十四、二先輩昆季)

我は鵷鷺えんろに随ひて煙雲に入り、謬たんちりて丹墀に上りて近臣と為り。

君は鵷鳳らんほうと同じて荊棘けいきよくに栖み、猶は青袍せんじんを著て選人と作る。

という隔句對が成されていることが読み取れるためである。さらに、七言排律以外、白居易の五言律詩にも、隔句對の用例が見出せる。

縹緲巫山女 帰来七八年

殷勤湘水曲 留在十三弦

(『白氏文集』卷六十八「夜聞箏中彈瀟湘送神曲感舊」)

縹緲ひょうびょうたり巫山の女、歸りて来たり七八年。

殷勤いんぎんたり湘水の曲、留りて在り十三弦。

これらの三つの相違点からみれば、承和以降の日本詩人が実際の作品に隔句對を用いる際に、白居易の運用法と完全に一致しておらず、独自の使い方を持

っていることが了解される。

このことは、日本漢詩文学の独特な展開と密接に関連していると考えられる。九世紀後半の日本漢詩人は、漢詩の格式作法を学習する過程で、前代の人が築いた土台の上で、創作能力がより高まり、自由自在に詩作の形や風格を作り上げる事ができ、また、当時流行している白居易の詩作から刺激を受けながらも、前代の『文鏡秘府論』や『文撰』などの書物からも詩作格式の情報を読みとりながら、大いに研鑽を積み重ねたのである。これらは、日本漢詩人の隔句対の使用法が、白居易と共通点を有しながらも、完全に一致していない大きな原因と言えよう。今後、中国漢詩との共通点と共に相違点にも注目するという問題意識を抱きながら、さらに日本漢詩の対句の形という課題をめぐって考察しようと考えている。

【注】

- ①張伯偉『全唐五代詩格彙考』（鳳凰出版社 二〇〇二年）に収録。「第一の名對、第二隔句對、第三雙擬對、第四聯綿對、第五異類對、第六双声對、第七疊韻、第八迴文對、第九同類對」（『筆札華梁』。上官儀。約六〇七—六六四年）。「第一の名對、第二隔句對、第三雙擬對、第四聯綿對、第五互成對、第六異類對、第七賦體對、第八双声對、第九疊韻對、十日回文對、第十一意對。第十二頭尾不對。第十三不對對。（『文筆式』。作者不詳。盛唐以前）「八對。一曰正名、二曰隔句對、三曰雙声、四曰疊韻、五曰連綿、六曰異類、七曰回文、八曰雙擬。」（『詩格』。旧題魏文帝。初唐）。『詩對有六格。一曰的名、二曰雙似、三曰隔句、四曰聯綿、五曰互成、六曰類對體。』（『詩議』。皎然。七二〇—七九八年）
- ②詩文の引用と訓読は、興膳宏『弘法大師空海全集 第五卷』（筑摩書房 一九八六年）に従う。
- ③『詩經』の詩文の引用は、石川忠久『詩經』（明治書院 一九九七年）に従い、訓読は主に石川忠久の訓読を参考にした。
- ④『文選』の詩文の引用と訓読は、内田泉之助・網祐次『文選』（詩篇上）（明治書院 一九六三年）に従う。
- ⑤『律令』日本思想大系3（岩波書店 一九七六年）
- ⑥島田忠臣の詩文の引用と訓読は、小島憲之監修『田氏家集』（和泉書院 一九九四年）に従う。
- ⑦菅原道真の詩文の引用は、川口久雄『菅家文章・後集』（岩波書店 一九六六年）に従い、訓読は、主に川口久雄の訓読を参考にした。
- ⑧道真詩の創作時間については、注7の書を参照されたい。
- ⑨王力『漢語詩律学』「第三十三節、古体詩対仗」（中華書局 一九七三年）を参照されたい。
- ⑩白居易の詩文の引用は、岡村繁『白氏文集』（三）（明治書院 一九八八年）に従い、訓読は主に岡村繁の訓読を参考にした。
- ⑪原文は中国語。「両聯相對、白居易最喜歡用。（略）甚至於用到律詩裡去。然而對仗終當認為古風所有」。
- ⑫原文は中国語。「白香山律詩句法多創。…其「酬主簿」等詩又開七律隔句扇面之體」（周振甫・冀勤。

錢鐘書『談芸錄』読本（上海教育出版社 一九九二年八月）五五三頁）

*** 討議要旨**

相田満氏は、隔句対は秀句撰という媒体の中で尊重されていた対句表現と考えることは可能か、と質問し、発表者は、道真の作詩態度を例としながら、本質問について否定的見解を示した。